

### (三) 「唱歌法取調書」 伊澤修二

この文書は伊澤がボストンにおいてメーソンとともに作成したものであったが、伊澤の帰国後、明治十一年六月、文部省へ提出した。伊澤の帰国はその一カ月前の五月である。これには同時に作製した唱歌掛図が添えてあった。この掛図は一八七八年(明治十一)秋のパリ展覧会にメーソンが出品している。この事実は一八七九年十一月二十日付、伊澤宛メーソンの書簡によって明らかである。

今此唱歌掛圖ヲ文部大輔田中公ノ閣下ニ呈スルニ當リ爰ニ數言ヲ述ベ以テ其掛圖ヲ製スルノ舉ノ由テ起リシ所以ト僕等ガ常ニ目的トセシ本理トヲ略述シ以テ閱者ノ誤了ナカラム事ヲ願ヒ併セテ将来唱歌ノ一科ヲ興スノ一助タラム事ヲ冀フナリ

抑此掛圖ヲ製スルノ舉ハ米國ボストン府音楽監督メーソン氏曾テ我教育理事官ニ同氏編著ノ掛圖ヲ贈リシ後我國教育ノ學科中唱歌ノ一科未ダ備ラザルヲ傳聞シ頻ニ其道ノ未タ亞細亞地方ニ興ラザルヲ憂ヒ我國ノ學校ニ其良種ヲ施シ他日其良果ヲ獲ン事ヲ思立チシニ根セシナリ彼氏ノ望實ニ此ノ如シト雖モ奈セン彼氏日本語ヲ解スルニ非ズ又其人民ノ風習教育ノ景況等ヲ熟知スルニ非ズ徒ニ其志ヲ懷クト雖モ之ヲ達スルノ路ナシ因テ惟ラク日本生徒ニシテ能ク當時日本ノ教育ヲ知ル者ヲ得之ガ助ニ因テ其掛圖ニ挿ムニ日本語ノ謡曲ヲ以テシ其國語ヲ以テ其感情ヲ歌頌ニ發スルヲ得セシメバ其道始テ興ルベシ其志始テ達スベシト於是一日途中逍遙ノ際一ノ日本生徒ニ邂逅シ之ヲ我家ニ招キ頻ニ唱歌ノ科ヲ日本ノ學校ニ置クヘキノ理由ヲ説キシカドモ其彼氏ヲ助クベキノ意力ナキヲ知り大ニ一時ノ失望ヲ懷ケリ一昨年ノ秋僕偶彼氏ニ遭遇シ後目賀田氏ト共ニ彼氏ノ家ニ至ル

彼氏僕ニ告ルニ平素ノ志ヲ以テス僕亦曾テ我國ニ在ルノ日學校唱歌ヲ興スノ肝要ナルヲ知り良師益友ヲ得テ少ク其道ノ何物タルト之ヲ興スノ方法如何トヲ研究セント欲スルノ際ナレハ大ニ其志ノ篤キト其道ヲ尚フノ重キ此ニ至ルヲ感シ且其好機失フ可ラザルヲ知り遂ニ共ニ心力ヲ尽シテ其舉ヲ全セン事ヲ約セリ

當時僕ブリッヂウヲートル師範學校ニ在学シ他事ニ消費スルノ時間ニ乏シト雖モ彼氏ノ篤志ノ非常ナルヲ感シ且我國ノ唱歌未ダ興ラザルヲ憂ルノ餘リ土曜ノ休日毎ニボストン府ニ至リ彼氏ニ語ルニ我國歌詞ノ成立法及句調法等ノ大概ヲ以テシ彼氏僕ニ授クルニ彼音楽ノ理唱歌ノ法等ヲ以テシ交互談論ノ上其見偶相合フ者アリ相反スル者アリ一曲一詞得ルニ從テ之ヲ插入シ遂ニ大凡二年ノ星霜ヲ経テ其唱歌掛圖略其形ヲナスニ至レリ然リト雖モ僕素ヨリ我音楽ニ精キモノニ非ズ又我歌学ヲ知ル者ニ非ズ其志大物ノ如シト雖モ其業針頭ダニモ如カズ疑問ヲ解クベキノ益友ナク教訓ヲ受クベキノ良師ナシ古典ヲ考ルノ書ナク新作ヲ学ブノ籍ナシ頼ム所ノモノハ唯我一精神ト忍耐力アルノミ其情勢此ノ如キガ故ニ其成果ノ拙劣ナル此ノ如キニ至ルハ理ノ當然ニシテ敢テ僕ガ憾トセザル所ナリ唯諸哲ノ點驗批評ヲ経テ我歌詞謡曲ノ彼音楽ノ理ニ基キ彼樂譜ノ則ニ從テ謡ヒ得ベキ者アルノ理ヲ證スルヲ得バ僕ガ満足スル所ナリ

此唱歌掛圖ハ米國ボストン府音楽監督メーソン氏編著ノ最下等ノ小学ヨリ最上等ノ諸學校ニ至ルマデ正シク順序ヲ遂テ教授スベキモノ、内最下級用ノ一部ニ據リテ製セシモノナリ故ニ其謡詞ノ如キ極メテ簡短ニシテ幼児ノ解シ易キ者ヲ用ルヲ旨トセリ其用語ノ如キ寧ロ甘シテ卑淺ニ近キノ批評ヲ受ルモ却テ高尚ニ陥ルノ弊害ヲ免レン

事ヲ望メリ閱者宜ク其意ヲ了スベシ

唱歌法凡例

此掛圖中用ル謡ハ或ハ我國在来ノ謡曲ヲ採リ或ハ全ク新作ヲ試ミ或ハ原著ノ意ニ擬シテ製セシ者アリ是レ元来此掛圖ヲ製スルノ本旨ハ充備完全ニシテ直ニ諸学校ノ用ニ供スベキノ目的ニ非シテ却テ將來唱歌ヲ起スベキ一箇ノ經驗タラン事ヲ要旨トスルヲ以テ其孰レカ正孰レカ否孰レカ便孰レカ不便ナルヲ試ムカ爲ナリ

我國ノ歌謡ハ雅俗ニ拘ラズ新古ヲ問ハズ自ラ一定ノ句調アリテ變易スベカラズ故ニ彼樂譜我謡曲ニ用フ可ラザル者アルニ似タリ蓋各國固有ノ語風然ラシムル所ナリ閱者掛圖中謡詞ナキモノアルヲ怪ム莫シ

我國ノ歌謡古来一定ノ押韻法ナシト雖モ元来押韻ハ自然ニ謡ノ調子ヲ整ルノ性質ヲ具セル者ナレバ古来ノ琴歌俚謡等ニモ知ラズ識ラズ押韻ヲ用ヒシ者其例少カラズ例ヘハ俚謡ニ 富士の白ゆきや(アノ韻) 朝日で消える(ウノ韻) 娘島田は(アノ韻) ねてとける(ウノ韻) ノ如シ此例ニハ初句ト第三句ハ五十韻第一ノ緯行即チ「ア」ノ韻ヲ用ヒ第二第四ノ兩句ハ第三ノ緯行即チ「ウ」ノ韻ヲ用ヒタル者ノ如シ是レ即チ西洋ノ詩ノ押韻法ニ最モ能ク類似セルナリ

此掛圖中ニ用ル謡詞ハ素ヨリ小学ノ最下級ニ用ルモノナレバ決シテ高尚ヲ旨トスルニ非ズト雖モ押韻ノ如キハ唱歌ノ調ヲ整ルニ最モ肝要タル言ヲ待タザル所ナレバ成ル可キ丈之ヲ用ルヲ旨トセリ然シテ其押韻法ハ今假ニ五十韻ニ據リ五種ノ緯行ヲ同韻ト定メ總テ五韻アルト見做シ各行ノ頭字ヲ用テ「ア」ノ韻「イ」ノ韻等ト區別セリ其當否ノ如キハ諸哲ノ卓見ニ依リ後日自ラ相定ル所アルヲ待ツノミ

明治十一年六月

伊澤修二

一、掛圖中ハ「クレフ」ノ「クレフ」ハ原意鍵ノ義ニシテ樂譜ノ初音ノ起ル度ヲ示スモノナリ記号ニシテ各國通用ノモノ故其儘之ヲ用ウ

一、一ニ三四五六七八ハ「スケール」ノ「スケールハ音調ノ順序ヲ定ルモノニシテ梯子ノ義ナリ」名ニシテヒー、フー、ミー、ヨー、イー、ムー、ナー、ヤー、ト讀ムベシコハ謡フニ其調ヨキカ爲ナリ

一、ハ、ニ、ホ、ヘ、ト、イ、ロ、ハ「ピッチ」ノ「ピッチ」ハ諸音相互ニ昇降スル度ヲ示スモノニシテ原意高サノ義ナリ」名ニシテ其ノハ、ヨリ始ル者ハ歐米各國皆其國字ノ第三ヨリ始ムルノ例ニ據ルモノナリ

一、掛圖ニハ總テ假字ヲ用テ左ヨリ右ニ書セリ是レ謡フニ便ナルガ爲ナリ別ニ假字ト漢字トニテ書タル一小冊子ヲ添ヘ以テ看官ノ便ニ供ス

右ハ其大略ヲ摘録スルノミ其他ノ細事ニ至テハ實地ニ臨ミ口舌ヲ以テ論辨スル所アルヘシ

掛圖中ノ謡「( )」と發音を示スルビおよび「同韻」という文字とを結ぶ線は朱で書かれている」  
祝へ 祝(へ)、はつ春 祝(へ)、  
右新作  
四方山(に) 春けら(し)  
右新作  
初音 はつ(ね) 囀(る) はつ(ね)

右新作

日の出 日の(で) 曜く 日の(出)

右新作

オー笛がな(る) オー誰をよ(ぶ)

右原意に擬して製す

千代や ちよ(と) 君か代 祝(ふ) 此「フ」ハオノ發音ヲ有ス

右新作

頼め 祈れ 賢き 神を

右原意に擬して製す

謡へよ 謡(へ) 謡て くら(せ)

右原意に擬して製す

坂は照る て(る) 鈴鹿は 曇(る) 間の土(山) 雨が

ふ(る)

右我在来の謡

一ト夜明れは 賑か(に) 飾り立たる 松かさ(り)

右我在来ノ謡

花の 梢に 鳥啼渡(り) 山も 里も 春満にけ(り)

右新作

色は 匂へど 散りぬるを 我世 誰そ 常ならむ 憂の奥山

今日越えて あさき 夢見し 酔もせず

右我在来之歌

蝶鳥 蝶鳥 菜の葉に止(れ)

菜の葉に 飽たら 桜に止(れ)

桜の花の 榮る御代(に)

止れよ 遊べ 遊へよ 止(れ)

右愛知師範学校の作

春の彌生の 曙に 四方の 山邊を 見渡せば 花盛りかも し

ら雲の 掛らぬ峰こそなかりけれ

右我在来之歌

はちすば 生える 池の邊(に)

一人の児が あそひし(か)

遙のきしに 美はし(き)

はちすの花の 見えけれ(ば)

手折りて 来ばと 一ト筋(に)

迷ぞ 深かき 欲のふ(ち)

踏入る 様に おどろき(し)

母は たゝちに はせ来た(り)

いとしや 我子 けなけな(や)

助けよ 神と呼さけ(ぶ)

聲の限りは しら波(や)

沈みつ うきつ 漂へ(る)

果こそ しらね 藻鹽く(さ)

底のみくづと消えうせ(ぬ)

右原意に擬して製す

〔手書き〕

(四) 「音楽傳習所創設議案」

伊澤修二の意見により文部省学務課久保田讓の起案で明治十二年三月八日付省内各課長、少輔、大輔、卿に回覧され、ようやく十一月にこの